

ACTS 8:4-40- ROAD TRIP WK1

****INTRO(導入)****

みなさんの中に、ドライブ旅行(ロードトリップ)が好きな方はどれくらいおられますか？ 車に荷物を積み込み、お菓子を買込み、お気に入りのプレイリストを作り、ナビに目的地を入力して、いざ出発する。あの瞬間には、何とも言えないワクワク感がありますよね。どんなドライブ旅行も、まずは計画から始まります。目的地は決まっている。どこで休憩するかも分かっている。どれくらい時間がかかるかも、ルートも分かっている。しかし、ある程度旅慣れた人なら分かるはずですが、ドライブ旅行が計画通りに進むことなんて滅多にありません。工事渋滞に巻き込まれたり、通行止めがあったり。渋滞が発生したり、回り道を余儀なくされたり。すると突然、ナビが計画を遮るように「ルートを再検索します」と告げるのです。そして正直なところ、私たちはこの「再検索」があまり好きではありません。私たちは確実なものを好みます。私たちは自分でコントロールしたいのです。自分がどこに向かっている、どうやってそこへ辿り着くのかを、正確に知ってきたいのです。それでも、ドライブ旅行で最も記憶に残る瞬間というのは、決まって「まったく計画していなかった瞬間」だったりします。偶然見つけた絶景の展望台。出口を通り過ぎてしまったおかげで見つけられた美味しいレストラン。

時には、その回り道そのものが、目的地になることもあるのです。

****TENSION(緊張・問題提起)****

この「ロードトリップ」という新しいシリーズを始めるにあたり、まさにこれと同じことが『使徒言行録(使徒の働き)』の中で起きています。これまでの7章にわたり、すべての出来事はエルサレムで起きていました。教会はエルサレムにあり、使徒たちもエルサレムにいて、宣教もエルサレムで行われ、その勢いもエルサレムの中にありました。

ところが、ステファノが殺害されます。迫害が巻き起こり、家族はバラバラになり、信者たちは家を追われます。人間の視点から見れば、これは大惨事です。教会が敗北しているように見えます。宣教の使命がストップしてしまったかのように思えます。

しかし、神の視点から見れば、福音はついに「車庫」を出て走り出したのです。

イエスは以前、こうなることをすでに彼らに伝えていました。使徒言行録1章8節で、イエスはこう言われました。「しかし、聖霊があなたがたの上に降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」福音は、決してエルサレムだけに留まるためのものではありませんでした。福音は、常に旅に出る(外へ広がっていく)ためのものだったのです。問題は、誰も「このルート」を選びはしなかっただろう、ということです。迫害を戦略として選ぶ人など誰もいません。苦難を拡大の手段として選ぶ人など誰もいません。それでも神は、私たちが決して自分では選ばないような道を通して、しばしば働かれるのです。

これに共感できる方はおられますか？ 自分が計画した覚えのない道を、いま歩んでいるという方はいませんか？「今頃の自分の人生は、もっと違ったものになっているはずだった」と思っ

ているかもしれません。「夫婦関係はもっと円満なはずだった」「経済的にはもっと余裕があるはずだった」「子どもたちは別の道を選んでいるはずだった」「退職後の生活は違った景色のはずだった」と。神が自分をある方向へと導いていると思っていたのに、突然、全く違う場所にぽつんと立っている自分に気づくのです。

そして、そういう瞬間にこそ、私たちは問いを投げかけ始めます。「神様、何をされているのですか？ なぜこの道なのですか？ なぜこのルートなのですか？ なぜこのタイミングなのですか？ なぜこれを止めてくださらなかったのですか？ なぜあの祈りに応えてくださらなかったのですか？ なぜあの扉を開けてくださらなかったのですか？」

使徒言行録8章は、私たちに教えてくれています。「しばしば『後退(挫折)』に見えるものは、実は神様による『お膳立て(準備)』なのだ」ということを。

「回り道」に見えるものが、実は「神が備えられた特別な出会い(アポイントメント)」になることがよくあります。「間違った道」に見えるものが、実は「神が最も用いられる道」になるかもしれないのです。

ですから今朝は、使徒言行録8章を通して、みんなで一緒にドライブ旅行に出かけましょう。この章を読み進めながら、私たち全員が同じ車に乗り合わせているところを想像してみてください。その道中、私たちはいくつかの道路標識に出くわすことになります。普段、道路標識なんて簡単に見過ごしてしまいますよね。私たちは毎週、何百もの標識を一瞥もくれずに通り過ぎていきます。しかし、すべての道路標識には、私たちを導くという目的があります。そして今日、この聖書箇所を旅していく中で、私たちはあることに気づくはずですよ。それは、聖霊がずっと前から、私たちの目の前に標識を置いてくださっていたということです。私の祈りは、この道のどこかで、神があなたに見せようとしておられるその標識に、あなたが気づくことです。

(祈り)

****TRUTH(真理)****

さあ、聖書とノートを開いて、心に留めていきましょう。使徒言行録(使徒の働き)8章4節からです。思い出してください。ステファノが石打ちにされて殉教したばかりの場面です。タルソのサウロが先頭に立って教会を迫害し、信者たちを家から追い出し、散り散りにさせました。その結果がこれです。

さて、散らされた人たちは、御言葉を告げ知らせながら巡り歩いた。

私は、ルカが「あえて書かなかったこと」が大好きです。彼は、彼らが「隠れた」とは書いていません。「諦めた」とも書いていません。「使命を放棄した」とも書いていません。彼らは「御言葉を告げ知らせた」と書いているのです。敵は教会を「バラバラに引き裂いて(散らして)駆逐した」と思ったかもしれません。しかし神は、教会を「世界に蒔いて(広げて)」おられたのです。サタンが福音を止めるために意図したまさにそのことが、福音が拡大するための手段となりました。

5 フィリポはサマリアの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた。6 群衆は、フィリポの言うことを聞き、彼が行っていたしるしを見て、異口同音に彼の話に聞き入った。7 汚れた霊に取りつかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫びながら出て行き、多くの病気の人や足の不自由な人がいやされたからである。8 町の人々は熱狂して喜んだ(その町には大きな喜びが沸き起こった)。

さて、この「フィリポはサマリアの町に下って行き」という短いフレーズは、つい読み飛ばしてしまいそうになります。しかしその前に、私たちはこの旅における最初の道路標識にたどり着いたようです。

「回り道(Detour)」です。

回り道が好きな人なんていません。運転しているとき、回り道があるということは、普通、予定していた道が閉鎖されていることを意味します。計画が変わってしまったということです。たいてい、予定よりも時間がかかります。正直なところ、私たちはできることなら回り道を避けたいと思います。

しかし、使徒言行録8章が私たちに教えてくれるのはこういうことです。「時として、神様の最大の業(わざ)は、私たちが決して自分では選ばないような『回り道』の上で起こる」ということです。フィリポはサマリアへ下って行きました。

これは現代の私たちには大したことに聞こえないかもしれませんが、1世紀のユダヤ人にとって、これはとてつもない大回り(とんでもない進路変更)でした。サマリアは、熱心なユダヤ人が進んで行きたがるような場所では決してありません。ユダヤ人とサマリア人の間には、何世紀にもわたる敵対関係がありました。人種の壁、宗教の壁、そして文化の壁があったのです。それでも、福音はあらゆる壁を乗り越えます。神はフィリポを、多くの人が避けて通るような、まさにその人たちのもとへと方向転換させたのです。

神様は、私たちの「召命(ミッション)」を広げる前に、まず私たちの人生を「方向転換(リダイレクト)」させることがあります。私たちが自分では決して選ばないような道へ連れて行かれるのは、私たちがそのままでは決して出会わなかったはずの人々が、そこにいるからです。神様の回り道は決して気まぐれではありません。そこには常に、神様の目的があります。群衆は耳を傾けました。人生が変えられました。悪霊は追い出されました。人々はいやされました。ルカはこの様子を、ある美しい一言で要約しています。「その町には大きな喜びが沸き起こった(そこには多くの喜びがあった)。」イエスが現れたからこそ、喜びが現れたのです。サマリアにとっての最大のニーズは、より良い政治でも、より良い経済でも、より良いチャンスでもありませんでした。彼らの最大のニーズは、イエスだったのです。

そして、それは今日も変わりません。ライアンでも、プリマスでも、デトロイト都市圏でも、私たちの周りにあるすべての地域社会において、最も深いところにあるニーズは、今もイエス・キリストなのです。

そこで皆さんに質問させてください。神様があなたの目の前に置かれた「回り道」の中で、あなたが抵抗し続けているものは何でしょうか？ もしかしたら、それはあなたが避けている「ある人」のことかもしれません。引き延ばしている「あの対話」かもしれません。居心地が悪そうに感じる「奉仕(ミニストリー)の機会」かもしれません。自分では決して選ばなかったはずの「人生の季節(ステージ)」かもしれません。神様の回り道を軽んじないでください。あなたが歩む予定のなかったまさにその道が、誰かの人生に、そしておそらくあなた自身の人生に、最大の喜びをもたらす場所になるかもしれないのです。

続いてルカは、シモンという一人の男を紹介します。

9 ところが、この町に以前からシモンという男がいて、魔術を使ってサマリアの人々を驚かせ、自分は大物だと吹聴していた。10 小さい者から大きい者に至るまで皆、「この人こそ、評されて『大いなるもの』と言われる神の力だ」と言って、彼に注目していた。11 彼が長年の間、魔術で彼らを驚かせていたので、人々は注目していたのである。

シモンは、「周囲から称賛されること」の上に自分のアイデンティティのすべてを築き上げていました。聖書には、彼が人々を驚かせ、人々は彼のことを「『大いなるもの』と言われる神の力だ」と呼んでいたとあります。誰もが彼に注目していました。シモンはその注目を浴びる瞬間を、一分一秒愛してやみませんでした。シモンは影響力を愛し、パワーを愛し、自分が重要な人物として見られることを愛していたのです。しかし、フィリポが現れたときの「回り道(方向転換)」、その「シフト」に注目してください……。

12 しかし、フィリポが神の国とイエス・キリストの名について福音を告げ知らせるのを信じたとき、男も女もこぞって洗礼を受けた。13 シモン自身も信じて洗礼を受け、いつもフィリポに付いて回り、すばらしいしるしと奇跡が行われるのを見て驚いていた。

フィリポが現れてイエスを宣べ伝えると、突然、人々はシモンのことを話すのをやめ、キリストのことを話し始めました。スポットライトが移ったのです。群衆が移動しました。関心がシフトしたのです。シモン自身も信じて洗礼を受けました。しかし、まだ何かが完全に「正しい状態」ではありませんでした。

14 エルサレムにいた使徒たちは、サマリアの人々が神の言葉を受け入れたと聞き、ペトロとヨハネをそこへ派遣した。15 二人は下って行って、サマリアの人々が聖霊を受けるように祈っ

た。16 人々は主イエスの名によって洗礼を受けていただけで、聖霊はまだだれの上にも降っていなかったからである。17 ペトロとヨハネが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。

ここで少し立ち止まって、この場面をクローズアップしてみましょう。もし皆さんが私と同じなら、これを読んでこう思ったかもしれません。「待って、サマリアの人々はすでに神の言葉を受け入れて、洗礼も受けているのに、まだ聖霊が降っていなかったって？ どういうこと？」と。このメッセージを書いているとき、トラヴィス牧師とジョンから教えてもらった明快な解説を、少し皆さんと分かち合わせ残させてください。聖書の中で混乱しやすい箇所に出くわしたとき、素晴らしい鉄則となるのが「聖書をもって聖書を解釈する」ということです。特定の聖文だけを切り離して見てしまうと、聖書が互いに補い合っているのではなく、矛盾しているように見えてしまうことがあります。15節と16節をさらに理解するために、エフェソの信徒への手紙1章13～14節を見てみましょう。「あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、あなたがたを救う福音を聞き、また彼を信じたことによって、約束された聖霊の証印を押されたのです。この聖霊は、私たちが御国を受け継ぐことの保証であり、こうして神の民が贖われて、神の栄光がたたえられることになるのです。」

自分の人生をイエスに捧げ、イエスを救い主として信頼したその瞬間に、聖霊はあなたの心の中に住まわれます。ですから、サマリア人たちの内にはすでに御霊(みたま)がおられました。では、なぜヨハネとペトロはわざわざ彼らに会いに行き、すでに持っているはずの聖霊を受けるように祈る必要があったのでしょうか？ それは、聖霊が私たちを「絶えず満たしてくださる」からです。この瞬間、ペトロとヨハネは、サマリアの人々がサマリアの残りの地域へ大胆に福音を伝えるために、聖霊による「力づけ(エンパワーメント)」が必要であることを知っていました。彼らは、周囲の人々に証ししていく中で、大胆さと導きが与えられるようにと祈ったのです。ペトロとヨハネによる、祈りの力と意図的な関わり、なんと素晴らしい模範でしょうか！

18 シモンは、使徒たちが手を置くことによって霊が与えられるのを見て、金を差し出し、19「私が手を置けば、だれでも聖霊が受けられるように、この力を私にもください」と言った。20 すると、ペトロは言った。「お前の銀は、お前と一緒に滅びてしまうがよい。神の賜物を金で手に入れられると思ったからだ。21 お前はこのことに、何のかかわりも、あずかる資格もない。お前の心が神の前に正しくないからだ。22 だから、この悪事を悔い改め、主に祈れ。あるいは、心の企みが赦されるかもしれない。23 お前が苦い胆汁の中にあり、不義の縄目に縛られているのが、私には分かっている。」24 シモンは答えた。「あなたがたの言われたことが、何一つ私の身に起こらないように、主にお祈りください。」25 ペトロとヨハネは、主の言葉を力強く証し、語った後、サマリアの多くの村で福音を告げ知らせながら、エルサレムに帰って行った。

ペトロとヨハネが到着し、聖霊が目に見える形でサマリア人たちに注がれたとき、シモンはその「パワー」を目にし、すぐにそれを自分のものにしたいと考えました。彼は金を差し出して言い

ました。「この力を私にもください。」ペトロの返答は辛辣でした。なぜならペトロには、本当の問題が何であるかが見えていたからです。

私たちは今、この旅における2つ目の道路標識にたどり着いたようです。

「譲れ(Yield / 前方優先)」です。

私たち全員、この標識を何百回と見てきています。「譲れ」の標識は何を意味しているのでしょうか？

それは、「他の誰かに優先権(通行権)がある」ということです。それは「あなたがもうコントロールしていない」という意味です。スピードを落とし、従い、他の誰かを先に行かせる、という意味です。そしてこれこそが、まさにシモンが葛藤した部分でした。

シモンは神の「パワー(力)」は欲しがりましたが、神の「オーソリティ(権威)」は欲しがらなかったのです。神の「ギフト(贈り物)」は欲しがりましたが、神の「統治(支配)」は欲しがりませんでした。彼は、自分が神の計画に降伏するのではなく、聖霊を「自分の計画」のために利用しようとしたのです。ペトロは言います。「お前の心が神の前に正しくない。」

それこそが、シモンという存在が象徴している危険性です。シモンは、神様が導こうとされているものを、自分でコントロールしようとしたのです。私たちがシモンを厳しく批判しすぎる前に、私たち自身もどれほど頻繁に、これと全く同じことをしてしまっているかに気づくべきです。私たちは神様に、自分の計画を祝福してほしい、問題を解決してほしい、家族を守ってほしい、経済的に満たしてほしい、扉を開いてほしい、平安を与えてほしいと願います。それなのに多くの場合、私たちは「自分がハンドルを握ったまま」でいたがります。

聖霊は、助手席に座らせてほしいと頼んでいるわけではありません。あなたの「副操縦士」になりたがっているのでもありません。

優先権を持っているのは聖霊です。御霊(みたま)は、私たちがコントロールするためのパワーではありません。

私たちが従うべき「ガイド(導き手)」なのです。時に、神様が私たちに求めておられる最も重要なことは、アクセルを踏むことではなく、「譲る(ハンドルを明け渡す)」ことなのです。

そこで皆さんに伺います。あなたの人生の中で、「譲る」必要があるのはどこでしょうか？ 神様を信頼する代わりに、どこであなたがハンドルを握りしめ、コントロールしようとし続けているのでしょうか？ それは、あなたが直面している「ある決断」ですか？ 何とかしようとしている「人間関係」ですか？ 自分の力だけで解決しようとしている「状況」ですか？

今週、スピードを落とし、降伏し、神様に優先権を明け渡すとは、具体的にどのような姿になるでしょうか？

NEXT TURN(次の角を曲がる)

26 さて、主の天使がフィリポに言った。「立って、南へ向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け。」この道は荒れ野(砂漠)である。**27** そこで、彼は立って出かけた。

ここに、3つ目の道路標識があります。

「次の角(Next Turn)」です。

ナビ(GPS)の案内がまさにそういう仕組みになっていることに気づいたことはありますか？ ナビは、これから曲がるすべての角を一度に教えてくれるわけではありません。ただ「次」の曲がり角だけを教えてくれます。「400メートル先、右方向です」と。

そこを曲がると、また「次」の案内をしてくれます。

これこそ、神様がしばしば私たちを導かれる方法ではないでしょうか。フィリポは全体の旅程を受け取ったわけではありません。

神様は彼に、エチオピア人のことなど一言も言いませんでした。イザヤ書53章のことも言いませんでした。

洗礼を受けることになることも、この会話がアフリカへ福音が広がるきっかけになることも、何一つ告げませんでした。ただ「南へ行け」、それだけです。一つの指示。次の角。

これこそが、イエスに従う中で最も難しいことの一つです。なぜなら、私たちはマップの全容を欲しがるからです。私たちは、この決断が5年後にどこへつながるのかを知りたがります。すべてがどう解決するのかを知りたがります。YESと言う前に、神様にあらゆる「なぜ」に答えてもらいたいのです。

しかし、神様は通常、そのような働き方はされません。

たいていの場合、神様はただ「次の角」だけを示されるのです。

今日、皆さんの中にもそのような状態にいる方がいるかもしれません。神様が計画のすべてを見せてくれないので、もどかしく思っている。あなたは祈っています。「神様、この仕事に就くべきですか？ 引っ越すべきですか？ あのミニストリーを始めるべきですか？ あの難しい話し合いをするべきですか？ 留まるべきですか？ 行くべきですか？」

それなのに、神様は5年間の長期計画をくれません。それはおそらく、神様があなたに「目的地を突き止めること」を求めているからでしょう。神様はただ、あなたに「次の角を曲がる」ことだけを求めておられるのかもしれませんが。

私自身の神様との歩みの中で気づいたことがあります。神様は、先の5マイルを照らす光は滅多に元に明かしてくれませんが、足元の5フィートを照らす光は、ほぼいつでも与えてくださるのです。

27節には、ただこうあります。「そこで、彼は立って出かけた。」

躊躇も、交渉も、これ以上の詳細の要求もありません。あなたの人生において、次の角を曲がるために、どこで神様を信頼する必要がありますか？

神様の御心(みころがみ)は、通常、一世一代の大ジャンプによってではなく、「次の角を曲がる」という従順を一つずつ積み重ねる中で見つかるものです。そしてフィリポがその次の角を曲がったとき、彼は、神様がすでにその曲がり角の先で働いておられたことに気づきました。そこには、真理を追い求め、イザヤ書を読み、イエスについての良き知らせを誰かが説明してくれるのを待っている、一人のエチオピア人の高官がいたのです。

すると、そこへ、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の全財産を管理していた、エチオピア人の宦官(かんがん)がやって来た。彼はエルサレムに礼拝に来て、28 帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。

この男は非常に興味深い人物です。彼は裕福で、影響力があり、教養があり、権力もありました。王国全体の財政を監督していたのです。それほどの成功を収めていたにもかかわらず、彼はまだ「探し求めて」いました。神を求めて、何百マイルも離れたエルサレムまで旅をしてきたのです。当時としては信じられないほど高価だったイザヤ書の巻物まで持っていました。彼は宗教的で、誠実で、真剣に探求していました。それなのに、彼の心はまだ空っぽだったのです。

これはなんと大きな気づきでしょうか。成功していても、何かを求め続けていることがあります。裕福であっても、探し求めていることがあります。宗教的であっても、聖書を持っていたても、なお満たされずに探し求めていることがあるのです。

29 御霊がフィリポに言った。「近寄って、あの馬車と一緒に行け。」

御霊に促されたときは、ただその通りにするのが、いつだって最善の選択です。

30 フィリポが走って近寄ると、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりですか」と言った。**31** 宦官は、「手引き(ガイド)してくれる人がいなければ、どうして分かるでしょうか」と言い、馬車に乗って一緒に座るようと、フィリポに頼んだ。**32** 彼が読んでいた聖書の箇所はこれであった。「彼は、羊のように屠殺場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙っている小羊のように、口を開かない。**33** 卑しめられていたとき、不当な裁き

(正義)が彼に拒まれた。彼の時代のことを、だれが語れよう。彼の命は地上から取り去られるからである。」**34** 宦官はフィリポに言った。「言っておきますが、預言者はだれについてこう言っているのですか。自分についてですか、それともだれか他の人についてですか。」

フィリポが走って駆け寄ると、彼が預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえました。そこでフィリポは、この章の中でも最も重要な質問の一つを投げかけます。「読んでいることがお分かりですか。」宦官はこう答えます。「手引きしてくれる人がいなければ、どうして分かるでしょうか。」私はこの答えが大好きです。なぜなら、ここには謙虚さが溢れているからです。見栄も、偽りのスピリチュアリティも、すべてを知っているかのような振る舞いありません。ただ、正直に「助けが必要です」と言っているのです。クリスチャンとしての全生涯は、ここから始まります。私たちが格好をつけるのをやめ、すべてを理解しているかのように振る舞うのをやめ、助けが必要だと認めるその瞬間に。

それから、宦官はフィリポを馬車に招き入れました。このエチオピア人がここで何をしたかに注目してください。「ここへ上がって、一緒に座ってください」と。自分の馬車に、言い換えれば「自分のプライベートな空間」へと招き入れ、近くに来ることを許可したのです。表面的な部分よりも深く入ってくることを許しました。私たちは日々、求めもしないアドバイスを散々受けて、時には影響されることもあります。大抵は片方の耳から入って、もう片方の耳から抜けていきます。しかし、私たちが腕組みを解いて人を招き入れ、「自分の人生に真理を語りかける許可」を与えるとき、素直に学ぶ姿勢(ティーチャブルな心)と、御霊に導かれる力が本当に発揮され始めるのです。ですが正直なところ、人を招き入れるのは簡単なことではありません。特に過去に傷ついたり、手痛い目に遭ったりしたことがあるなら、なおさらです。自分の人生に口出す許可を人に与えるには、相当な信頼と「弱さを見せる覚悟(ヴァルネラビリティ)」が必要です。他人に口を出されたくないような、プライベートな領域に入り込ませるわけですから。

もし夫婦関係で行き詰まっているなら、どうか腕組みを解いて、信頼できる人を見つけ、その領域にアドバイスをくれるよう許可を与えてください。あるいは健康面かもしれません。何人かの方は、腕組みを解いて、いい加減に病院に行って診てもらう必要があります(分かります、私も病院は大嫌いです)。もし子育ての特定の問題で溺れそうになっているなら、腕組みを解き、信頼できる人に白旗を上げて「アドバイスをください」と言ってください。その依存症や特定の罪をどうしても克服できないとき、一人で歩まないでください。もしあなたの人生のその領域に、誰かが口出す許可を与えたら、一体何が変わるでしょうか。

35 そこで、フィリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスについての福音(良き知らせ)を告げ知らせた。

素晴らしいですね。フィリポはイザヤ書から始めましたが、最後はイエスへと行き着きました。なぜなら、聖書の中にあるすべての道は、最終的にイエスへと通じているからです。預言者たちはイエスを指し示し、生け贄の儀式はイエスを指し示し、神殿はイエスを指し示し、律法はイエスを指し示しています。すべてがイエスを指し示しているのです。

36 道を進むうちに、彼らは水のあるところに来た。宦官は言った。「ご覧ください、水があります。私が洗礼を受けるのに、何か助け(差し支え)があるでしょうか。」

読み進める前に、あることに気づいてほしいと思います。36節を読んで……その後の37節を探してみてください。

皆さんの中には、「あれ？ 私の聖書、36節から38節に飛んでいるぞ」と思っている方や、「37節が脚注(ノート)になっている」という方がおられるはずです。一体何が起きているのでしょうか？

実はこれこそ、私たちが聖書を信頼できる理由を示す、一つの例なのです。1611年に『キング・ジェームズ訳(口語訳の古典)』が翻訳された当時、翻訳者たちはその時点で手に入る最高のギリシャ写本(テキストウス・レセプトウス)を忠実に使用しました。その後、神様は考古学者や学者たちを用いて、1611年当時よりも何百年も古い、より初期のギリシャ写本やコピーを発見させてくださいました。700年から100年も古いものです。

それらの最も古く、最も信頼性の高い写本には、この37節が含まれていません。一方で、それより後代の写本には含まれているものがあります。そのため、翻訳によっては37節を脚注に入れたり、本文から外したりしているのです。

ちなみに脚注を見ると、37節にはただこう書かれています。「フィリポが、『真心から信じるなら、差し支えありません』と言うと、宦官は、『私は、イエス・キリストが神の子であると信じます』と答えた。」これは素晴らしい信仰告白であり、新約聖書の至る所で教えられていることです。これがあったとしても、使徒言行録のメッセージの本質は何一つ変わりません。初期の教会が洗礼の前に信じていた告白を、後代の写字生たちが反映させて書き加えた可能性が高い、というだけのことです。

これを聞いて、「ほら見ろ、聖書なんて信用できないじゃないか」と言う人がいるかもしれませんが、実際には、全く逆の結論に至るはずです。何も隠されていません。何も揉み消されていません。聖書の翻訳者たちは完全に透明性を保ち、「最も古い写本にはこう書かれています」と正直に提示しているのです。私にとって、これは神の言葉への信頼を弱めるものではなく、むしろ強めるものです。神の真理は入念な調査にも耐えうるものだからこそ、聖書には隠すことなど何もないのです。

さあ、旅の道に戻りましょう。

38 宦官は馬車を止めるように命じた。フィリポと宦官の二人は水の中に入って行き、フィリポは彼に洗礼を授けた。**39** 水から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った(さらっていった)。宦官はもうフィリポの姿を見られなかったが、喜びにあふれて旅を続けた。

自分の洗礼式のときにこんなことが起きたらと想像できますか？ 水から上がったら、洗礼を授けてくれた人が忽然と消えているのです。もしかしたら、8月にある私たちの次の洗礼式でも起きるかもしれませんね。

40 フィリポはアゾトに姿を現した。そして、すべての町を巡って福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。

皆さん、ここに教会における史上初の「瞬間移動(テレポーテーション)」が見られます。神様がフィリポをスタートレックのようにそこから転送させたのです。最高だと思いませんか？ そろそろ私たちにもその能力が備わってもいい頃ですよ。デトロイトの渋滞に巻き込まれても、「問題ない、テレポーテーションだ」と。カリブ海のビーチでまったりしたい気分なら、サングラスを掴んで「テレポーテーション」。誰か使いたい人はいませんか？ 私は一日中やっています。……よし、話を戻しましょう。

****LAST THOUGHT(最後のメッセージ)****

最後のメッセージです。私たちは、フィリポが馬車の中でエチオピア人の宦官に説明している姿を見えています。自分がその馬車に同乗し、イエスこそがイザヤの描写した「苦難の僕(しもべ)」なのだと聞かされているところを想像してみてください。イエスは、私たちが決して送ることのできない生涯を歩まれました。御父(ちち)に完全に服従されたのです。屠殺場に引かれる小羊のように連れて行かれました。自ら進んで十字架に向かわれました。私たちの罪を背負われました。私たちの受けるべき刑罰を代わりに受けられました。私たちが死ぬべきだったその死を、代わりに死んでくださったのです。そして3日後、墓からよみがえられました。今や、信じる者は誰でも罪の赦しを受け取ることができます。宗教によるものではありません。行い(パフォーマンス)によるものでもありません。教会への出席回数によるものでも、行儀の良さによるものでもありません。ただ、イエス・キリストへの信仰のみによるのです。

福音とは、私たちが神様のために何をするかではありません。福音とは、神様が御子(みこ)を通して、私たちのために何をしてくださったか、なのです。馬車を走らせながら、エチオピア人は信じました。そして水のある場所にさしかかったとき、聖書のテキストに文字通り書かれている「最後の標識」が登場します。彼はすぐに応答したのです。馬車を「止めろ(STOP)」と命じ、洗礼を受けました。

言い訳はありません。条件も、交渉もありません。「忙しいから」とか「後でやるよ」なんてこともありません。従順になることが最優先事項となったため、ドライブ旅行は一時停止したのです。そしておそらく、今日のあなたにとって、この章の着地点はまさにここにあるのではないのでしょうか。

皆さんの中には、聖霊がずっと前から語りかけているのに、そのまま車を走らせ続けている人がいます。

先延ばしにし、遅らせ、言い訳を続けている。

しかし今日、御霊は「止まりなさい。車を脇に寄せなさい(Pull over)！」と言っておられます。

ある人にとって、それは「今自分が歩んでいるその道を、神様に信頼して委ねる」という意味です。もしかしたら、あなたは自分が決して選ばなかったはずの道を歩んでいるかもしれません。不満を感じ、混乱し、神様に「なぜですか」と問いかけているかもしれません。使徒言行録8章は、神様の最大の業のいくつかは、私たちが決して自分では選ばないような道の上で起こるのだと気づかせてくれます。神様に対して怒ったり不満を抱いたりするのをやめて、今あなたがいるその道を、本当に神様に信頼し始める必要があるのです。

またある人にとって、それは「洗礼」を意味します。イエスがあなたを救ってくださったと分かっていながら、信者の洗礼を通して、公にイエスとの結びつきを表明したことがない。ずっと引き延ばしていたり、いつか訪れるはずの「完璧なタイミング」を待っていたりする。言い訳をするのをやめて、洗礼を受けましょう。

あるいは別の人にとっては、立ち止まって「神の救いを受け入れる」必要があるかもしれません。あのエチオピア人のようにずっと探し求めていながら、まだキリストに人生を明け渡していない。そんなあなたは、今ここで立ち止まる必要があります。

***回り道(DETOUR)** — あなたが行きたくない、あるいはやりたくないと思っていることで、神様が「そこへ行け、それをせよ」と方向転換を求めているのはどこですか？

***譲れ(YIELD)** — 神様があなたに「コントロールを明け渡しなさい」と降伏を求めているのはどこですか？

***次の角(NEXT TURN)** — 神様があなたに「次の角を曲がるまで私を信頼しなさい」と求めているのはどこですか？

***止まれ(STOP)** — 神様があなたに「今すぐ立ち止まって、従いなさい」と求めているのはどこですか？